

# 「四地域を通して考える地蔵盆 ～世代間の伝承と地域コミュニティの機能～」

(指定課題：地蔵盆などの地域の伝統行事の現状と地域コミュニティ活性化への影響)

研究代表者 真下美弥子 (京都精華大学人文学部・教授)

研究協力者 真下 厚 (立命館大学文学部・教授)

同 深澤光佐子 (児童文化研究者)

研究協力部署 文化市民局地域自治推進室地域づくり推進担当

## 1. 研究概要

**研究の背景** 地蔵盆は京の町々の地蔵を祭る民俗行事であり、住民自治と関わって伝承された生活文化である。かつては京のどの地域でも盛んに行われ、町内の各世代間の連携の場となってきた。しかし近年は多くの町内で行事が衰退し、あるいは消滅しているという。今回調査した町内の場合も、開催日程が2日間から1日へ短縮された例があり、その周辺には半日へと縮小された町内もあった。また、「景品を渡すだけ」「ホテルで食事会を行うことで代替」とする例もあった。このような縮小化・簡略化の理由として各町内の人々は、なによりも子ども人口の減少と、おとなたちの準備の負担の大きさをあげている。

**研究の目的** 地蔵盆の衰退の原因はこのように、「現代の実情にそぐわない」ことにあると言われる。しかし、京の町に数百年ものあいだ息づいてきた伝統行事を、このまま衰退させてよいものだろうか。これらの問題を考える際には何よりもまず、「地蔵盆」とは何なのかを問い直すことが必要となろう。

**研究対象** そこで第一章では立地条件の違う複数の町内の地蔵盆を調査し、現時点での地蔵盆の実態を明らかにする。第二章では近世期に町行事として営まれた地蔵会・地蔵祭を中心に、その始原から現在までを通時的に検証する。

**分析方法** 調査に際しては主として民俗学的手法によって地蔵盆各行事についての聞き取りを行い、同時に静止画・動画による記録を行う。聞き取りの際には a.地蔵の祭祀のあり方 b.行事の具体的な内容 c.準備や運営の方法 d.世代間の協力や伝承の構造等に留意する(第一章)。あわせて文献資料の解読を行い、調査の結果をふまえて京の地蔵盆の特質を明らかにし(第二章)、今後のあるべき姿を提示する。

## 2. 研究のオリジナリティ

地蔵盆に関わる研究は少なくない。しかし京の中心部の各町内の地蔵盆に関わる、祭りの詳細や運営の実態を述べたものは、ほとんど例をみない。また近世期の町行事としての地蔵会・地蔵祭の特性を論じる試みも、類例のないものである。

### 3. 研究内容

#### 第一章 調査報告

##### (1) 上京区M町地藏盆

##### 開催日時

2012年8月19日(日)

##### 町の概況

京都御苑の北西にあたり、今出川通りに平行して南側を通る武者小路通りの両側に位置している。元亀2(1571)年の文書に見える、上京立売組の「東武者小路」「中武者小路」が当町に相当する(1)。室町通り・武者小路通りはともに近世期には主要な交通路であったが、現在は落ち着いた住宅地となっている。世帯数は昭和の頃までは約100軒あったが減少。最近大きな邸宅を4分割して宅地開発した結果、子育て世代が入居して45軒となった。

##### 町内会組織と地藏盆の運営

現在町内には45軒が居住。町内会組織としては6組に分かれており、世話役は毎年各組から選出される。当町は上御霊神社の氏子域にあたり、毎年5月の祭礼には剣鉾を出している。この祭礼への参加と地藏盆が、町内の年間最大のイベントとなっている。

地藏盆の運営については町内会長と町内の六つの組から出た世話役が担当。費用は町内会費および、当日各戸から受付に納められる「お供え」で賄われる。地藏盆の期間は8年前までは2日間にわたっていたが、負担軽減のために1日に短縮した。

##### 地藏の祭祀

<由緒>当町の花蔵は京の辻々にみられる一般的な「お花蔵さん」とは、ややおもむきを異にしている。「尼塚乾向花蔵尊(あまつかいぬいむきじぞうそん)」という正式名称を持ち、間口2メートルほどの堂内に石造りの威厳を湛えた花蔵像が祀られている。起源に関する詳細な事情は不明であるが、木製の厨子内部には江戸中期以降とみられる唐獅子・牡丹などの精巧な彫刻が施されている。

花蔵から数十メートルの距離の室町通り沿いには、福長神社が祀られる。明神社というのが稲荷信仰を複合した形跡があり、現在も参詣者は多い。明治以前は現在の京都御苑が公家たちの居住地であったことや、往時の室町通りが物流の盛んな通路であったことを考えるなら、武者小路通りは西陣方面への通路であり、この花蔵が長年にわたって町内の域を超えた信仰を受けてきたことも想像される。年配の方々はこの花蔵は町内の守り神であり、花蔵を祀ってきたことは町内の誇りだと語っておられる。

<祭祀>花蔵の管理と祭祀については年間を通じて、町内の各世帯から成る「奉賛会」で行っている。具体的には掃除・花替え、お供え等であり、町内6組のうちの年間の当番にあたった組で、1か月間の担当を年間2回受け持つことになる。

毎月23日が花蔵の縁日であり、このほか正月三が日の間は堂内に特別な飾り付けをする(12月末日に実施)。具体的には堂内の掛布・花蔵の前掛等を三が日用の特別なものに

掛け替える、堂内に鏡餅一式を供え祭壇両脇に正月用の花を飾ることなどである。  
<安産のホオズキ信仰>この地蔵には安産の信仰がまつわり、以前はホオズキに関わる次のような民間習俗があったという。

地蔵盆の最後の日に、お供えのお下がりとして1軒に2～3ケずつホオズキが配られた。このホオズキは正月まで各家の屋内に吊るしてカラカラになる前まで保存し、雑煮の前に水でぐっと丸呑みする。こうすると安産になるという。

このような習俗は遠方の人にも伝えられており、今でも訪ねてくる人がいるという。

### 会場の設営

毎年、乾向地蔵尊前の東側スペースが会場となる。そこは道路の幅がやや広くなっており、当日朝にテント2面を設営し、ゴザを敷く。以前は大きな行燈を吊るしたが廃止され、現在は町内50ヶ所に小さい行燈が飾られる。絵は町内の子どもが担当し、毎年貼り替えている。

### プログラム

- 8:00 テント設営
- 10:00 住職読経・数珠回し・紙芝居
- 10:30 子ども科学工作
- 11:15 子どもおやつ
- 14:00 モンキーシュート
- 14:30 輪投げ・ヨーヨーつり
- 15:00 子どもおやつ
- 15:45 家庭おやつ
- 16:00 子ども福引
- 17:00 家庭福引
- 18:00 ビンゴゲーム
- 19:00 片付け
- 19:30 親睦会

### 行事の内容と役割分担

次に当日の状況を時間の流れに沿って記す。

<8:00 テント設営>8時におとな15～6人が集合し、テントを設営。テントの軒部分には「卍」と「乾向地蔵尊」の名称が書かれた赤いちょうちんを20個ほど提げ、テント内部にはゴザを敷く。ゴザの上には数珠やモンキーシュートのボードなど、当日使用する祭具や遊具を置く。

<10:00 読経・数珠回し>10時前に僧侶が到着。これに合わせて年長の児童が鉦を叩きながら町内へ開始の知らせを告げて回る。10時に読経開始。年配の人々12人ほ

どが集まり、椅子に座して聴聞。その後方ではおとな8人ほど（年配者が多い）が立って聴聞していた。僧侶が読経する間、テント内のゴザの上では数珠回しが行われた（約13分間）。参加者は子ども17～8人、おとな6人。おとなは全員女性で、祖母世代と比較的若い母親世代が多い。若い母親の膝には乳児が抱かれ、母が手を添えるかたちで数珠回しに参加していた。ここではこのように多くの子が物心つかない年頃から町内の行事に参加するのが慣例になっており、これによって周りの子たちも幼い仲間を認識することになるのだろう。子どもにとっても地藏盆は「共同体」を意識する大切な機会となっているようだ。子どもを守るという地藏への信仰が徹底しており、各世代参加の行事であることがよくわかるシーンである。

<10:15 紙芝居>読経の後、住職が子どもに「子ガニのカイチャン」の紙芝居を披露。子どもを見守るように、祖父母たちも背後で聴聞。

<10:30 科学工作>町内の40代の父親が指導。高校生の娘二人がアシスタントを務めて、スライムを作った。子どもの参加は22名（乳児含む）。工作の間も祖父母世代は後方から見守っていた。一人一人に材料を用意してもらいコツを伝授されて、子どもたちは楽しそうだった。

<11:15 子どもおやつ>子どもたちはおやつをもらって一旦、解散。

<14:00 モンキーシュート>モンキーの目や口の部分が開いたボードに、ボールを投げ込むゲーム。当たった場合はくじ引きで景品がもらえる。ここでも科学工作を担当した父娘3人組が進行役を務めた。くじ引きと景品渡しは祖母世代の女性が担当。

<14:30 輪投げ・ヨーヨーつり>輪投げは景品つきで、よちよち歩きの子どものも参加。残った景品はくじ引きを行って子どもたちに分配された。

<16:00 子ども福引>乳児・幼児（男女別）・小学校低学年（男女別）の年代ごとに景品が用意され、一人一人が三角くじを引いて景品が渡された。小学校高学年と中学生には図書券等の景品が配布された。

<17:00 親睦会>当日は終了後に親睦会が行われた。

### 行事・運営の特徴について

当町の場合は子どもの参加が多く（特に乳幼児～小学校低学年）、町内に子どもの数が多かった昭和の時代の地藏盆のプログラムをほぼ守っているように見えた。このような子ども数の多さは外孫の参加を促している結果ともみられる。外に嫁いだ女性たちにとってはこのような盛大な地藏盆が楽しみで、この日に里帰りする人が多いという。現在、実際に地元に住む子は9人。最近、子育て世代の家族が他地域からミニ開発された所に移り住んだことでこの人数となった。内容的には手厚く行き届いた地藏盆であり、これを支える役員さんたちの並々ならぬ努力を感じた。

## （２）東山区N町地藏盆

### 開催日時

2012年8月18日（土）・19日（日）

### 町の概況

知恩院の新門前から鴨川岸まで東西に通る新門前通西部の両側に位置している。延宝2（1674）年の文書に町名が見え、寛文年間（1661－73）の新門前通の開通直後に成ったと考えられる。正徳4（1714）年の文書に、家数35軒と見える（2）。現在は約120戸。

新門前通の南側にはお茶屋街の祇園新橋通が並行して通り、当町の場合も伝統的な町家が点在する、しつとりと落ち着いた商業地を形成している。古美術商、高級呉服商、貴金属商、旅館、仕出屋などが並び、伝統芸能の家元も在住する。

### 町内会組織と地藏盆の運営

古くから住み続けてきた人々の多い町内で、町内会活動は盛んである。昭和30年代に地域の青年会活動に参加したシニア世代が、町内会活動の担い手となっている。地藏盆は町内会役員を中心に運営される。町内会費とは別途に「地藏費」が設けられ、1戸につき「参加人数×600円」（任意）を納めるが、これ以外に地藏盆当日朝に「お供え」を持ち寄ることが慣例となっている。

### 地藏の祭祀

祇園町の北側地域は江戸時代以来の市街地で、人の往来の盛んな土地柄であることも関わって、辻々に地藏や大日如来の祠が数多く祀られている。当町の場合は江戸時代から地藏を祀ってきたといわれ、地藏供養の際に使われたという近世後期（弘化年間）の敷物が保存されている。これは毎年地藏盆当日に虫干しされる。

現在は計4体の地藏が町内3箇所に祀られている。現在70代の人たちが子どもだった頃には町内の3箇所で別個に地藏盆を営んでいたといい、4体の地藏を集めて開催するようになったのは戦後のことだという。4体の地藏は地藏盆前に祠から出して会所に集められる。彩色はしない。地藏は日常もよだれかけをしているが、当日は絹織物の特別なよだれかけに掛け替える。

### 会場の設営

<会場>毎年町内のほぼ中央に位置する、個人宅のガレージ兼倉庫のスペースが会場となる。当日は向かい側の邸宅の塀に沿って紅白の幕が張られ、縁台が並べられる。

<前日までの準備>道路使用許可願を出す。紅白の鏡餅を発注。お供えのお膳は町内の仕出し屋が担当。福引景品の買い付けは町内会長をはじめとする4人が担当し、ホームセンターやインターネットで購入する。当町の場合は最終プログラムの「おとな福引」だけでも、約400個の景品が用意される。通路に張り出されるプログラムは本年は町内会長が書き、イラストも描いた。以前は子どもが担当してイラスト入りの行燈を作っていたが、現在は廃止されている。

地蔵については、町内3箇所祀られている4体の地蔵を会場に運搬し、祭壇も整備しておく。また町内の15軒で分担して保管する地蔵盆用飾付備品を会場に集結させる。

### 地蔵盆行事とその内容

当日のプログラムは次の通りである。

1日目 18日(土)

11:00 読経・数珠まわし

14:00 サイコロころがし

16:00 ビンゴゲーム

19:00 文廻し

焼そば焼肉パーティー

2日目 19日(日)

11:00 子ども福引

14:00 あみだくじ アイス

19:00 おとな福引

焼そば焼肉パーティー

### 行事の内容

(1日目)

<8:00 準備開始>テントは貸し物業者が搬入、会場の前の道路に設営する。一方、役員さんたちは会場周辺の民家の塀に紅白の幕を張り、提灯を吊るす。提灯には電球が入り、地蔵盆の二日間の夜間照明となる。屋内では祭壇を設営し、「地蔵盆飾付備品」の箱を開けて各所に配置。仕出し屋から届いたお膳、花、紅白の鏡餅をお供えする。その後、あらかじめ袋詰めされたくじ引き景品を運搬し祭壇手前に配置する。

<10:00 お供え受付>

<11:00 読経・数珠回し>11時に僧侶が到着。この時点で集合していたのはおとな13人だけだったので、鉦を叩いて町内を回り、子どもの参加を促した。その結果、祖父母が孫を連れて来るかたちで数人の子どもが参加。計16人で数珠回しを行った。祖父母世代の人々の間に孫たちが交互に座り、「南無阿弥陀仏」と唱えながら数珠を左から右へ送る。その間、鉦も叩く。最後に「十念(「南無阿弥陀仏」を10回繰り返す)」を唱えた。坊さんからは「昔、京都では災害で子どもが沢山亡くなった、その供養が地蔵盆の始まりである」という旨の説経があり、その後、参加者にアイスを配布して一旦解散した。

<14:00 子ども福引>子どもたちが三角くじを引き、年齢性別に応じたおもちゃをもらう。

<16:00 ビンゴゲーム>各世代の約20人が参加。ビンゴカードを使用して行われ、先着順に景品が出された。

<18:30 役員集合>焼そば焼肉パーティーの準備のため、役員が集合。

<19:00 焼そば焼肉パーティー開始>雨天だったが一晩で町内の100人以上の人

が来場。床几が据えられて飲食しながら歓談した。メニューは生ビール、かき氷、焼肉、焼そば、その他ソフトドリンク類。かき氷は児童が担当し、焼そばは町内の仕出し屋が担当。町内の名物となっており、これを楽しみに集まる人も多いという。一方、屋内では「文廻し」が行われた。円型シートの中央部分で先端に針のついた軸を回転させ、止まった位置によって景品を獲得するゲーム。江戸時代に流行したというが、町内では十数体の「ドラえもん」を放射線状に描いたシートを使用して、おとなも子どもも参加できるゲームとなっている。数人で進行を担当し、大当たりが出ると「大当たり」と言いながら鉦を鳴らして祝う。

(2日目)

<14:00 サイコロころがし>主として子どもたちが大型のサイコロをころがし、点数に応じて景品が出された。

<16:00 あみだくじ>子どもたちが模造紙に書かれたあみだくじを引き、番号に応じたおやつが配布された。

<19:00 おとな福引・ビアガーデン>19時前におとなと子ども1人ずつが別々に鉦を鳴らして町内をふれ回ると、祖父母たちが孫の手を引いて集まってきた。これに続いて町内の各世代の男女が集まり、順番にくじを引いた。「おとな福引」は約400個の景品を用意する大規模な抽選会で、熟年世代の男性が進行役、20~30代の男性3人が景品を陳列場所から探して渡す役となった。くじ引きの後はビール・焼そば・焼肉等で歓談し、くつろいだ。2日間にわたる町内あげてのパーティーであり、人の輪が次々と結ばれてゆくところから、地蔵盆が地域のコミュニケーション促進に役立っていることがよく分かった。土地柄、地蔵盆会場の前を通りかかった内外の観光客が、飛入りで飲食を楽しむシーンも見られた。ちなみにこのようなパーティーはこの2、30年のことであり、それ以前は盆踊りが約30年にわたって行われていたということである。

### (3) 中京区I町地蔵盆

開催日時

2012年8月25日(土)・26日(日)

町の概況

二条城の南部に位置し、南北はおよそ六角通から三条通まで、東西は神泉苑通の西側から矢城通までの地域。三条通に面した部分は商店街となっており、その他の住宅地には昭和の頃までは染め職人が多く居住して、住宅兼工房となっていた。現在はマンションが増えている。当町周辺には平安京の遺跡が多く、町内の武信稲荷神社は平安時代の延命院および勸学院の鎮守であったと伝える(3)が、朱雀野の一部にあたることから中世には人家が途絶えたと考えられる。当町は元禄2(1689)年の京都御所拡張に際して、蛤御門付近の住人たちが移住したことから始まる(4)。『京都坊目誌』に「毎年七月八坂神社祭礼に此処の住民より、神輿をかく夫丁を出す。元禄以来今に変わることなし」と記される

ように、近世期以来、祇園祭の中御座神輿を担ぐ三若神輿会の担ぎ手を務めてきた町内のひとつで、祭礼に参加してきた男性も多い。

### 町内会組織と地蔵盆の運営

町内会加入戸数は47軒で、マンション住人は町内会に加入していない。町内会加入世帯は全体に高齢化しており、70代以上の人口が35人にのぼる。地蔵盆の対象となる子ども（乳幼児・小中学生）は7人いるが、このうち2名（5歳・2歳）は外孫である。地蔵盆の準備と進行は町内会長が中心になり、町内会の役員が分担して行っている。経費については町内会費からは出さず、地蔵盆当日に町内の人々が持ち寄る「お供え」をあてている。

### 地蔵の祭祀

地蔵は石造りの像一体。通常は町内中央の通りに面した三若神輿会の会所の南側の一角に祀られている。当町の地蔵は毎年、地蔵盆に際して彩色が施されることに特徴がある。地蔵は1週間ほど前に水洗いして、顔や衣装を描く。町内在住の絵心のある人が担当するが、描き方は描き手の裁量に任されている。以前は顔料等で描いていたが、今はポスターカラーで描いているという。前の晩に祠から運び出して祭壇に設置するが、かなり重たいという。

### 会場の設営

当町の地蔵盆は町内のほぼ中央部にある、三条台若中の会所の屋内が会場となる。建物は昭和のはじめに三若神輿会のために建てられた伝統的な様式の大きな町家。祭壇は1階座敷に設置され、町内会の役員さんたちも座敷や通り庭で実務をこなす。お供えのお膳は毎年、町内会長が自宅で調理する。内容はご飯・汁物・野菜炊き合わせ（人参・玉ねぎ）・叩きゴボウ・キュウリとワカメの酢の物など。お菓子は「卍」の型押しの大きめの紅白のらくがんと紅白餅10ヶ。地蔵盆では町内でまかなえるものは町内から調達するのが基本だが、当町には和菓子屋がないため他町の菓子屋に発注しているという。

### プログラム

8月25日（土）

9：00 お供え受付

10：00 僧侶読経

10：30 子ども・家庭用おやつ

12：00 子どもおやつ

15：00 子どもおやつ

16：00～18：00 ビアガーデン準備

18：00 ビアガーデン

8月26日（日）

10：00 子ども福引・家庭福引



## 行事の内容と役割分担

<前日までの準備>おやつや福引の準備は1週間前から行う。地蔵は1週間前に水洗いして彩色を施し、前日に祠から出して祭壇に設置する。

当日の進行状況は次の通りである。

<8:00 役員集合>町内会長と役員が会所に集合。祭壇の設置と飾りつけを行い、町内の人々のために冷茶を用意する。

<9:00 「お供え」受付開始>9時に開始されたが、10時以降も次々と町内の人々が訪れた。

<10:00 読経>20分程度の読経が行われ、計15人程度で聴聞。60代以上の人が多い。以前は数珠回しもしていたが、子どもが集まらないのでしなくなった。同様に以前は地蔵の祭壇の前に輪投げやボーリング等のおもちゃを出して遊ぶスペースを設けていたが、子どもが来ないので出さないという。

<10:30 子ども・家庭用おやつ>1日目のおやつはおとなに1回、子どもには3回出す。会所まで取りに来る場合もあるが、役員さんが各家庭に届けることが多い。

<12:00 子どもおやつ>12時頃、母親と2歳半の男児がおやつのハンバーガーを取りに来て、しばし雑談。それ以外の子どもは時刻が過ぎても取りにこないで、役員さんたちが各家まで届けた。

<15:00 子どもおやつ>

<18:00 ビアガーデン>ビアガーデンの開始前には、役員さんが近所に呼びかけを行う。メニューは、ビール、ジュース、お茶、かき氷、わらび餅、フランクフルト、焼そば、枝豆、叩きゴボウ、ちくわのピリカラ、じゃがバター。子ども用に金魚すくい・ヨーヨーつりも行う。参加者はおとな25名、子ども6名。ビアガーデンには敬老会の人たちも加わって交流を図っていた。

## 2日目

<10:00 子ども福引・家庭福引>子ども福引とおとな用の家庭福引の2種類があり、景品は子ども福引の場合、幼児用・小学生用・中学生用を用意している。くじは子ども用・おとな用ともに番号を書いた三角くじを引く形式である。以前は子ども福引で「ふごおろし」を行っていたが、今はしないという。子ども福引に来たのは、幼児(男)1人、小学生(女)3人。子ども用が一通り済んでから、おとなたちが次々とくじを引きに来る。順番に並んで番を待つ間も、おとなたちは会う人ごとに挨拶をし合う。怪我をした女性には安否を気遣う声かけられていた。おとな用の景品はトイレトペーパー・ティッシュペーパー・洗剤などの生活用品が多く、5キロまたは2キロ入りの米が出れば「当たり」だという。

#### (4) 左京区H住宅団地まつり

##### 開催日時

2012年8月25日(土)・26日(日)

##### 町の概況

高野川の左岸に位置する、分譲マンション約650戸から成る団地。1981年の建設当時は、団塊の世代のサラリーマン世帯が子育て期に入居するケースが多かった。現在も当時の居住者が一定数おり、全体に少子高齢化の傾向がみられる。

##### 管理組合の組織と団地まつりの運営

団地の入居者は管理組合に加入し管理組合費を納めることが義務づけられている。理事は各ブロックから選出され、1年ごとに改選される。団地まつりは2012年度までは理事会(自治推進理事が中心的に担当)・棟委員・子ども会を中心に実行委員会を設け、敬老会準備会・管理事務所・入居者の協力によって開催されてきた。しかし少子高齢化による人手不足で、中心的担当者である自治推進理事は多忙を極めており、今後理事会においては各部で分担して担当する予定という。費用は管理組合費から出されている。福引・おやつ・金魚すくいやヨーヨー釣りなどについてはチケットが発行され、幼児から中学生までの子どもには事前調査の上、無料で配布される。そのほか当日券も販売される。

##### 地蔵の祭祀

当団地は紡績工場の跡地に建設された関係上、当初は地蔵がなかった。1981年春の創設後まもなく「子どもたちに地蔵盆の楽しさを体験させたい」という声があがり、団地まつりが開始されたが、その際には壬生寺から地蔵をレンタルした。数年後に管理事務所の裏手の共有スペースに数体の石の地蔵が常置され、現在は7体に増えている。当初は雨ざらしの状態だったが、約10年前に屋根が掛けられた。日常の管理は管理組合によって行われ、美しく掃除されて花もささやかに供えられている。新生児誕生の際にはよだれかけの奉納が行われるなど、子どもたちには親しまれてきた。地蔵盆当日はこの地蔵のスペース前にテントが張られ、供養が行われる。

##### プログラム

###### 1日目

14:00 行灯吊り下げ式・お地蔵様供養

15:00 ふれあいコンサート

17:00 夜店開始・ジャズ演奏

17:20 自治会会長挨拶

18:30 ジャグリング

19:00 ビンゴゲーム

###### 2日目

10:00 子ども福引

## 行事の内容・役割分担

<14:00 行灯吊り下げ式・お地蔵様供養>子どもたちの描いた絵が貼られた大型の行灯を木の上に通したロープを引っ張って吊り下げる儀式。小学校低学年ぐらいの子ども4・5人が参加。ほかに遠くから見ている子どもが10人程度。参加者はおとな・子どもを合わせて50人あまり。地蔵供養のスペースに移ると、参加者は70人ほどに増えていた。そのうち子どもは28人。僧侶が蠟燭に火を灯して法要が始まる。ビニールシートには、小学生の子ども20人弱が座り、後方の椅子にはおとなや乳児連れなどが座った。20分あまりの長い法要だったが、子どもたちは静かに聞いていた。その後、僧侶の説法があり、お地蔵様がなぜ子どもを守る仏様なのか、三途の川を渡った後の子どもを鬼から護るために長い袖の法衣を着て子どもを隠す話や、普通に毎日が過ごせることが有り難いことだという意味の話が行われた。

<15:00 ふれあいコンサート>校区の中学の吹奏楽部員23名によるコンサート。聴衆は100人ほど。そのうち子どもは27人。中学生たちは地元の人々の前で意欲的に演奏していた。

<17:00 夜店開始>管理組合の役員さんが担当。飲食はビール・ソフトドリンク類・焼そば・おにぎりなど。このほか金魚すくい・ヨーヨー釣りも行われた。これらと並行して今年初めての試みとして住民らによるジャズ演奏があり、130人ほどが聴き入った（そのうち子どもは36人ぐらい）。また敬老会準備会による「お茶席コーナー」には20名あまりが参加した。

<17:20 管理組合理事長挨拶>

<18:30 ジャグリング>大学の大道芸サークルのペアが20分ほど実演。160人ほど集まり、そのうち子どもは63人ぐらい。このほか熟年の女性によるバルーンアートも行われた。

<19:00 ビンゴゲーム>団地まつりで最も熱気をおびるイベント。開始10分後の段階で約280名（そのうち子ども約110名）が参加。約30分で景品が出尽くして終了した。参加賞も出された。

## 2日目

<10:00 子どもくじ引き>年齢・性別に応じて景品が出される。子ども会によって運営され、事前の買い出しや袋詰めは保護者が担当。当日は20代から40代ぐらいの父親たちが会場設営し、母親たちが細かい作業を担当した。

注 (1)(2)(3)(4) 日本歴史地名大系『京都市の地名』(1979 平凡社)。

## 第二章 京の地蔵盆の来歴と特徴

### 京の町と地蔵盆

地蔵盆は8月後半に営まれる、地域の地蔵をまつる祭礼である。地蔵盆と呼ばれる行事は関西を中心とする広域に見られるが、京の中心部の各町内の地蔵盆は、中でも最も古い歴史をもっている。地蔵盆は「町内」という小さな単位で営まれてきた性格上、これに関する記録はわずかではあるが、「地蔵会」「地蔵祭」の名で近世の京の各町内で行われた祭礼をほぼそのまま、今日に受け継いでいる。

京の中心部の各町は応仁の乱頃から近世前・中期にかけて成立するが、「地蔵祭」の名は貞享2（1685）年刊、黒川道祐『日次紀事』に見出すことができる。また後述するように各町内の規定を記す「町式目」類にも、「地蔵会」「地蔵祭」に関わる記述が散見する。これらは多くの場合、明治初年の廃仏毀釈の影響のもとに一旦中止に追い込まれるが、明治中・後期に次々と復活された。ちなみに京の町で「地蔵盆」の呼称が一般化するの、それ以降のことであった（1）。その後、第二次世界大戦時にも中断されたが、戦後は再び復活した。昭和後半期以降には市内広域に建設された新興住宅地やマンションでも、盛んに行われた。このように地蔵盆はつねに京の町とともに生きてきた行事なのである。

### 前段階としての四角四境祭と六地蔵参り

近世の各町内の「地蔵盆」「地蔵会」がどのような経緯で始められたかについては、必ずしも明らかではない。ここではその前段階として論じられてきた、平安京の四角四境祭と中世以降に盛んになった六地蔵参りを通して、その性格を検討してみよう。四角四境祭（道饗祭）は疫病流行時などに平安京の四隅、および逢坂・山崎・大枝・和邇等の国境で行われた疫神祭である。これら境界の地は疫病等の「わざわい」が侵入すると恐れられた地点であり、そこでは陰陽寮の官人によって外部からの悪霊・悪疫侵入防止が祈願された（2）。もう一つの源流とされる六地蔵参りは中世以降に行われた（3）。地蔵の縁日とされる旧暦7月23・24日に、木幡・鳥羽・桂・常盤・鞍馬口・四宮など、京の町の6ヶ所の街道口に祀られた地蔵を巡拝する行事である。諸国と京都を結ぶ出入口であるこれらの街道口は、京の「うち」「そと」の接点と観ぜられ、そこに地蔵が祀られたことから悪霊や悪疫侵入防止（4）の意が考えられよう。6体の地蔵像については小野篁作であることが伝えられ、その参詣については現在も、「厄よけ」「息災」「延命」の祈願ならびに初盆等の靈魂供養も託されている。ここからは六体の地蔵たちに空間・時間を越えた、広い救済が期待されたことが知られるのである。

### 町内における境界と地蔵祭祀

六地蔵に託されたこのような信仰は、京の各町内の地蔵にも通底する。周知のことではあるが近世の京の各町は、住民自治の単位としての世界を形成していた。当代には各町の出入り口に門が設置され夜間は閉されるなど、「うち」「そと」が強く意識されたが、そこでの防犯・防災のシンボルとなったのが地蔵であった。地蔵たちの祠はほとんどの場合、町の出入口や岐路、もしくは角や突き当たり等に置かれる。これらの地点は防犯の要所で

あり、そこに地蔵を祀るのは住民に防犯についての喚起を促すという、知恵にもとづいたものであった。

近世の京の町の暮らしは火災や盗難、飢饉や食糧難、疫病の流行等が多く、しかもこれといった保障もないため、不安に満ちていた。肩を寄せ合い助け合う暮らしの中では、生活基盤を同じくする地縁こそが命綱だった。古い町内に祀られた地蔵の祠の石柱や幕にはしばしば、「町内安全」の文字が刻まれる。そこからは何よりもこれが地蔵に託された切実な願いであったことが伝わってくるのである。

### 京の町の地蔵信仰

近世の京の町々の「地蔵会・地蔵祭」の成立については、平安時代以来貴族や庶民の間で行なわれてきた地蔵信仰の流れについても、視界に入れる必要があるだろう。「地蔵と閻魔は一（ひとつ）」ということわざの通り、地蔵は閻魔と表裏一体となって現世後世を広く救済する仏として信仰された。平安中期以降には貴族の間で地蔵講が営まれ、中世には庶民の間でもそれが定期的に催されるようになっていた。

近世の各町内の地蔵祭祀の普及はこのような信仰とも関わるが、その一方で注意したいのは、各町内で供養される地蔵たちのほとんどが素朴な石像の形態をもつことと、これらが地域の地蔵と認識されてきたことである。このような形態や認識は各地の共同体で祀られてきた、道祖神や賽の神とも通底する（5）。今回の調査地である東山区N町の70代の男性は地域の地蔵を「いつも助けてくれる、守ってくれる存在」と表現されたが、地蔵に寄せるこのような思いは各町内に共通するものだろう。地蔵たちはこのように、町内固有で現世後世を救済してくれる存在として親しまれてきた。その管理についても町内の結びつきを前提としてなされ、宗派を超えて維持されてきたのである。

### 近世期の各町内での開催形態

中世近世の京の町では周知のように住民自治が行われ、その一環として各種の寄合とともに、宗教とも絡んだ行事が町単位で定期的に営まれていた。主として春秋2回の「お千度」では祇園社や今宮社等、比較的広域の氏子圏をもつ神社への参拝が行われたが、これに対して地蔵会・地蔵祭の場合は町内ごとに営まれた。それらの行事は飲食を伴う場合が多く、これによって住民相互の関係を確認するものでもあった。

中世末から明治期にかけて各町で作られた「町式目」からは、断片的ではあるが地蔵会・地蔵祭が町内の主要行事であった様子を垣間見ることができる。たとえば上京区筋違橋町の式目第一章（6）には、「本年新宴会二季出納勘定会、春秋御千度、且地蔵会、都合七会、従前通町費トス」とする条があり、また同式目第三章にはこれら年間5回の会費、合計12円50銭の内訳が「金三円、新年宴会費（中略）金壹円五拾銭、地蔵会費」とされる。ここからは「お千度」とともに地蔵会が町内の定例行事だったことが知られる。また上京区妙蓮寺前町の式目（7）には「一、地蔵祭り町分より鳥目五百文出ル 若衆中、借家、行事其外町中世話致有申事」と見え、町内に住む人々総出で行われたことが記される。運営については例えば上京区元中之町の式目（8）の「一、地蔵会小豆飯煮メしたし物酒肴

共備物ヲ用可申、・・・」という記事等から、共同飲食を伴っていた内実が知られるのである。京の各町内の場合は主に地縁によって共同体が構成される。地蔵はその地縁のシンボルであり、年に一度の地蔵会・地蔵祭は地縁更新の場となってきたのだろう。

### 祭礼形態と子どもの参加

このように江戸時代の各町内では地蔵会・地蔵祭が主要行事の一つと位置づけられていたが、地蔵をめぐる祭事の具体的な運営についての記録はきわめて乏しい。しかし「祠から出す」「洗う」「祭壇を設置」「読経・念仏」については、今回の調査地である東山区N町・中京区I町をはじめ、古い町内で等しく行われていることから、近世以来の儀礼と考えられよう。これらは地蔵の霊力の再生・更新を意味する行為と考えられ、それを町内の共同作業として行うことによって、地縁的な絆を確認する場となったのである。

近世の地誌や随筆類を見ると、貞享2（1685）年刊の黒川道祐『日次紀事』7月24日（旧暦）「洛下ノ童児地蔵祭り」項には、子どもたちが辻々の地蔵に香や花を供えて祭った様子が、次のように記されている。

洛下児童各ノ香華ヲ街衢ノ石地蔵ニ之ヲ祭ル蓋シ道饗祭ノ遺風カ（9）

この時代には地蔵会・地蔵祭において、子どもたちが一定の役割を果たしたと思われる。上京区長尾町には、近世期の町内の地蔵祭祀をめぐる「長尾町地蔵尊縁起式帳」（10）が残されている。そこには当町の祭祀が慶長（1596～1614）頃から始まったことや、地蔵像が元禄年間からのものであることなどが記される。その末尾に宝暦11（1761）年徳川家重死去に伴う地蔵会中止令によって、地蔵会が「内々」に行われたという、次のような覚書が見える。

尤、立花盛物等例格に任せず、盛物餅五十、ほうつき百五十相調、講中よりまんちう五十、其外町内借家夜見せなどより捧候品計ニ而相銚り申候。格式之組重も壺組拵、廿三日朝飯後立会、銚り開關、木魚ニ而真読念仏、夜ニ入百万遍念仏之を勤。則、廻向ニして直ニ仕廻片付、夜食。

ここには供えものの盛花・果物・菓子などは例年通りには行かないとしながらも、祭壇には数多くの餅・ホウズキ・饅頭や、お重一組を供え、読経や百万遍念仏（数珠回しを伴うと考えられる）を行ったことが記される。このような形態は現代の地蔵盆とさほど変わらないが、むしろ現代以上に盛大な印象を受ける。「長尾町文書」には、これよりも40年あまりさかのぼる享保3（1718）年の地蔵会（9）に、大掛かりな仮屋を建てて「作り物」を展示したという、次のような記事も見える。

井筒屋新七作り物をして出さる。其節、北の方へかりやを拵へ、作り物を置

〔割注 是迄も作り物有けれ共、少物故別而置所ハいらず。〕新七願望ありとの故ニ、かりや造用并ニろうそく等新七より出る。其後ハ町内地蔵講中ニ、毎年作り物出るニより、地蔵尊前のかりやをひろけ、年々杉丸太を借りて屋根ハとまをふきしなり

このように近世の地蔵会・地蔵祭では、祭壇の周辺を華やかに装飾して灯りをともすことが行われたようだ。「作り物」とはおそらく、華やかな意匠をこらした人形や花であろう。西陣の笹屋町の場合は明治8（1875）年の疫病流行の際にその退散を願って、等身大の糸人形をつくり、それは昭和43（1968）年まで継続された（11）。このような風流の作り物には疫神退散の願いが込められる場合が多いが、高度な工芸技術が発展した近世の京の町では制作を競い合い、これを通して町内が一致団結した様子が想像される。これらの史料からは近世の京の町の地蔵会・地蔵祭において子どもも一定の役割を果たしたことや、それが町内の総力を結集して営まれたことが知られるのである。

### 明治から昭和初期の地蔵盆

地蔵盆は近世を通して各町内で営まれてきたが、明治初年の廃仏毀釈の影響下で町内の地蔵は廃棄され、地蔵盆は廃止に追い込まれた。これが復活を遂げたのは、地蔵たちを土中や川中から掘り起して再び町内に祀った（12）という、人々の熱意によるものであり、それは町内の潤滑剤としての地蔵の役割の大きさを示すものでもあろう。この近代における復活から第二次世界大戦前の時代までは、それほど大きな変化はなかったようである。今回の調査地である中京区I町周辺の80代の男性は、地蔵盆の当日にはふだんは入れない大きな屋敷が会場とされ、子どもも出入り自由だったことや、ご飯や菓子などがふるまわれて地蔵の前で遊んだことなど、特別な楽しい日であったことを述懐される。またこの頃には「畚（ふご）おろし」などの福引も行われていたといい、地蔵の法要を介在として町内の人々が集まり、ゆったりと過ごす日だったようだ。

### 戦後の地蔵盆

地蔵盆は第二次世界大戦の時期に中断され、戦後に再び復活を遂げた。現代の中年以上の人々は地蔵盆といえば、ヨーヨー釣りや金魚すくいなど、各種の遊びやおやつが用意された「子ども天国状態」を連想するだろう。このような盛りだくさんのプログラムで子どもたちを遊ばせるのは、戦後になってからの形態と考えてよい。京の町には職人や自営業者が多く、高度経済成長期以前にはまだ、休日に家族で行楽に出かける機会は少なかった。京の子どもたちにとっては8月の23・24日（旧暦7月24日の月遅れ行事）の地蔵盆は、夏休みの中でも格別なイベントとなったのである。

戦後間もなくから高度経済成長期にかけての時期に、このような地蔵盆が維持できたのは多くの場合、町内会組織のもとに青年会や子ども会が組織され、その連携があつてのことであった。今回の調査地である東山区N町の場合は、昭和30（1955）年に10代後半から20代の青年男女17人による青年会が組織され、定期的に若者同士の親睦を深

めるとともに、子ども会活動についても引率や指導が行なわれた。そこではハイキングや海水浴、クリスマスパーティーも行われ、地蔵盆も盛りだくさんのプログラムが実施された(13)。このような青年会活動はおよそ高度経済成長期の大学進学者の増加に伴って下火となり、やがて町内での異世代間の連携も衰退したのであった。

**付記** 京の町々では「地蔵さん」と同じような形態で「大日さん(大日如来)」を祀る場合があるが、本稿では「大日さん」については触れない。

## 注

- (1) 林英一『地蔵盆 一受容と展開の様式一』(1997 初芝文庫)。
- (2) 高橋昌明『酒吞童子の誕生 もうひとつの日本文化』(1992 中公新書)。
- (3) 『源平盛衰記』巻第六に、西光法師が六体の地蔵を安置したという伝承が見える。
- (4) 地蔵の功德を述べる「延命地蔵経」中の「地蔵十福」に「女人泰産・心根具足・衆病疾除・寿命長延」等があり、地蔵には「わざわい」を除け寿命を延ばす利益があると信じられた。
- (5) 上京区長尾町の「長尾町地蔵尊縁起式帳」(京都市編『史料京都の歴史7 上京区』(1980 平凡社)所収)冒頭部分には地蔵会について「当町地蔵会ハ、世上一統道祖神祭にして、慶長の比より有来し也」と記される。このような認識が当代の一般的なものであるか否かについては不明であるが、重要な一文であろう。
- (6) 京都市歴史資料館編『叢書 京都の史料3 京都町式目集成』(1999 京都市歴史資料館)所収。なお当式目は明治16年より施行されたが、内容の上からは江戸時代とそれほど変わらないと考えられる。
- (7) (8) 京都市歴史資料館編『叢書 京都の史料3 京都町式目集成』(1999 京都市歴史資料館)所収。
- (9) 『新修京都叢書第四 日次紀事』(1968 臨川書店)。なお引用部分については便宜上、書き下しもしくは通行の字体に改めるなど、一部表記を改めている箇所がある。以下の引用部分についても同様である。
- (10) 京都市編『史料京都の歴史7 上京区』(1980 平凡社)。
- (11) 梅原猛他監修『京都暮らしの大百科』(2002 淡交社)。糸人形は西陣織の生地や糸から作った、時代装束のきらびやかな人形である。
- (12) 伏見のまちづくりをかんがえる研究会他『子育ての町・伏見 一酒蔵と地蔵盆一』(1987 都市文化社)。
- (13) 東山区N町「青年会活動記録」によると、昭和30(1955)年8月上旬に行われた「町内地蔵盆打合せ会」席上で「福引以外の諸行事を青年会に依頼することが決定」した。祭事を除くその年の地蔵盆行事は「幻燈会」および「紙芝居・青年会コーラス・のど自慢・西瓜割・数当て・時間当て・盆踊り」であり、翌31(1956)年は「西瓜割・のど自慢・合奏・数当て・福引・盆踊り・仮装大会」だった。



## 4. 結果と考察——地蔵盆の有効性

### 4. 1. 地蔵は地域の守り神

京都は仏教文化の浸透した町であり、地蔵菩薩信仰は平安貴族以来の伝統をもつ。しかし京の各町内で継続されてきた地蔵祭祀は、このような密教系の地蔵信仰の流れをくむ一方で、境界性との関わりの中で民俗信仰としての性格を強くもって町内安全の守り神として維持されてきた。したがってその信仰は特定の宗教宗派にかかわらず、各町内の構成員によって保たれることが優先されるものであり、その点で宗教性は薄いといっておかろう。

### 4. 2. 地蔵盆は地域コミュニティの維持促進に有効

地蔵会や地蔵盆は当初から住民間で営まれてきたものであり、地蔵の子育て延命信仰に由来する子ども参加に特徴をもって、町内の各世代連携の場となってきた。戦後はこのような子ども参加の側面が拡大され、いわば「子どもを遊ばせる」形態が主流となったが、これは町内会および子ども会や青年会活動の連携の上で成っていた。その後、進学率の増加に伴う青年会活動の衰退によって、子ども会役員や町内会役員が担い手となり、現代ではシニア層が支える町内も珍しくない。

地蔵盆はこのように時代ごとに形を変えながらも、「町内安全」のシンボルである地蔵を介在として、つねに地域コミュニティの維持促進に役立ってきた。今回の調査地の一つである中京区I町の場合は、きもの産業の職人が多く居住した関係上、地蔵の彩色や祭壇整備などに専門的技術の協力がなされ、職人町としての文化を子世代に伝える場ともなってきた。同じく上京区M町や東山区N町では、江戸時代以来の地蔵を祀っており、地蔵盆開催時には町内に伝来する調度の虫干し等がなされる。地蔵盆はこのように、町内の歴史や文化の確認の場ともなっているのである。

### 4. 3. 少子高齢化と開催形態について

地蔵盆が衰退・簡略化されている現代の各町内では、その原因として子ども数の減少と負担の大きさをあげる。しかし既述のように地蔵たちは「町内安全」を第一の目的として祀られてきたものであり、子どもを遊ばせることはその一端と位置づけられよう。したがって「子ども中心の行事」という観念にとらわれずに実情に即したかたちで、地蔵を軸とする地縁更新の機会をもてばよいのではないだろうか。

今回の調査地の左京区H住宅は新興地のマンションであるが、地蔵供養をベースに持つガーデンパーティー形式の夏祭りを30年余り継続し、コミュニティの維持促進の場となってきた。当初は「子どもたちに地蔵盆の体験をさせる」ことが目的だったが、現在では高齢者人口の増加に伴って、その対応を模索している。

一方、現代では「里帰り参加」「外孫参加」とも呼ばれる、他地域在住の子どもが地蔵盆当日だけ、祖父母の居住する町内の地蔵盆に参加するというケースも増えている。上京区M町・東山区N町等の古い町内の場合、「実家の地蔵盆を体験させたい」という親世代の

意向による参加が多い。このような参加を通して子ども時代に京都の特色ある生活文化に親しんでもらうのは、むしろ歓迎すべきことだろう。中長期的には京都観光のリピーター養成にもつながる可能性が大きい。

## 5. 京都市への実践的な提言

### 5. 1. 無形文化遺産として保存

地蔵盆は職住一体を特色とする京の町で生まれ継承された、民俗文化である。衰退気味とはいえ、現在も多くの町内で「町内安全」を祈願する地蔵の祠が保たれ、8月後半には地蔵盆が営まれている。また日常的にも辻々に祀られた地蔵には住民の手で花が手向けられ、町並みに独特の景観を醸し出している。京の各町内で継承されている地蔵をめぐる民俗は、京の町の歴史とともに歩んだ、独自の文化である。

このような光景は現代では当たり前のように受け止められているが、居住形態や環境は急速に変化しており、長期にわたって継続してゆける保証はない。よって今後は無形文化遺産であることを確認し、保存してゆく必要があるだろう。

### 5. 2. 指定区域を設けて保存

地蔵盆は町内を単位として営まれる、小さな祭礼である。町内という生活の場が舞台となり、そこでの人間関係の中で営まれるものであることから、その継承保存の際にも難しい点が多いと考えられる。また地蔵の祠や背後の家並についての問題もある。今回の調査地の一つである東山区N町のような、京の中心部に位置する江戸時代以来の町内では、古い祭礼用具を共有で保存してきた経緯もあり、保存に際しては慎重な考慮が必要となろう。

### 5. 3. 地蔵盆の公開方法と「京のくらしと町家館（仮称）」の開設

地蔵盆については京都の生活文化として保存する一方で、これを公開することによって京都内外の認識を促す必要があるだろう。しかし町内を単位として営まれるプライベートな祭礼であり、小規模で行われてきたことや、道路を会場として使用するなどの開催形態の性格上、特定の町内の地蔵盆を公開することは、難しい面がある。そこで実際の町内とはやや離れた場などで別途に会場を設けて地蔵盆会場を再現し、展示することを提案したい。

a.一つの試みとしては京都三条会商店街や伏見大手筋商店街等のような、比較的規模の大きい商店街の空き店舗や集会場等を利用して、地蔵盆会場のしつらえや各種の遊びを公開することを提案したい。このような展示によって若い世代や子どもたちに、地域の伝統文化とその楽しさを伝達することが可能となる。将来的には各町内で地蔵盆行事を継承し、行事のないマンションではこれを開始する手がかりとなるだろう。

b.京の町には地蔵盆以外にも住居としての町家建築や・食文化など、各種の生活文化が発達してきた。しかし残念なことに、これまでこれらを研究し展示する機関はほとんど作られていない。東京都や大阪市の場合は、庶民の文化を保存し展示する博物館（江戸東京博

物館・大阪暮らしの今昔館など)があり、生活文化がつむぎ出される場となった「たても」を保存する会場も作られている。これらの施設では常設または期間限定で祭礼や年中行事の再現がなされており、小学生からおとなたちまで楽しく学べる場として人気が高い。

京の町には公家文化を受けつぎながら各種工芸を再創造していった、高度な職人の文化があり、その暮らしを独自の住民自治で支えた生活文化がある。従来から工芸や文献史料等の分野ではその収集保存が進められてきたが、生活文化についてはほとんど手つかずの状態である。町家建築の維持が難しくなり、また戦前の生活を知る人々が減少している現代においては、これを進めることが急務と考えられる。

#### 5. 4. 観光資源を視座に入れる

町かどに祀られる地蔵は京の町の特徴的な景物であり、町並みに独特の風情を添えている。町内一体で地縁の象徴としての地蔵をもち、花を手向け手を合わせて通るのも、京の町の独自の風景である。これらは京都人にとっては当たり前のことと受け止められているが、観光客にとっては異文化体験となる。

地蔵盆や盆踊り、節分おぼけなど、京都には観光資源になりうる貴重な生活文化が多く残されている。とりわけ夏の夜に提灯の灯りのもとで辻々に展開される地蔵盆や盆踊りは、「体験型」の観光資源であり、8月の観光閑散期の新しい顔となる可能性をもっている。これらは年齢を問わず楽しめるもので、従来寺社めぐりや公家文化、高級グルメ、伝統工芸等にかたよりがちで、贅沢なイメージがあった京都観光の起爆剤ともなるだろう。

子ども時代から京都を「異文化体験」できる町として親しんできた子どもたちは、生涯を通じて京都を訪れ、また京都を広く発信するようになることだろう。

#### 6. 今後の研究課題

今回は上京区・中京区・東山区・左京区の地蔵盆を調査して、ある程度の実態を把握することができた。しかしその一方で地域ごとの祭祀や運営形態のあり方の違いがあることも明らかになった。今回は調査に及ばなかったが左京区下鴨地域の旧街道筋には、市内中心部とはやや異なった形態の地蔵盆が営まれており、伏見区・山科区・西京区等の場合にも同様の経緯が考えられる。これらの地域に対しては、早急な調査が必要である。また、京の町内には由緒を自負するところも多く、文化財としての指定区域を設ける際には、慎重に検討することが必要であろう。

#### 参考文献

京都市編『京都の歴史6 伝統の定着』(1973 学芸書林)

日本歴史地名大系『京都市の地名』(1979 平凡社)

京都市編『史料京都の歴史7 上京区』(1980 平凡社)

- 五来重『宗教歳時記』（1982 角川選書）
- 伏見のまちづくりをかんがえる研究会他『子育ての町・伏見 ー酒蔵と地蔵盆ー』（1987 都市文化社）
- 五来重『石の宗教』（1988 角川選書）
- 野本寛一『軒端の民俗学』（1989 白水社）
- 高橋昌明『酒呑童子の誕生 もうひとつの日本文化』（1992 中公新書）
- 大島建彦編『民間の地蔵信仰』（1992 北辰堂）
- 田中久夫『地蔵信仰と民俗』（1995 岩田書院）
- 石川純一郎『地蔵の世界』（1995 時事通信社）
- 林英一『地蔵盆 ー受容と展開の様式ー』（1997 初芝文庫）
- 京都市歴史資料館編『叢書 京都の史料3 京都町式目集成』（1999 京都市歴史資料館）
- 八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』（2002 昭和堂）
- 梅原猛他監修『京都暮らしの大百科』（2002 淡交社）
- 服部比呂美『子ども集団と民俗社会』（2010 岩田書院）